



ベルフラワー

獣らの餌としました。…この人々の血を水のように流します。葬る者もありません。(2,3) と、多くの民が殺され、そのまま放置されている惨状を訴えます。このような情景は見るに堪えないものです。さらに わたしたちは近隣の民に辱められ／周囲の民に嘲られ、そしられています。(4) と、民は侮辱されています。詩人は 2 連で、この苦難、侮辱に耐えられず、敵である異国の民の上に、神が怒りを注いでくださいと、報復を願っています。

3 連で、どうか、わたしたちの昔の悪に御心を留めず／御憐れみを速やかに差し向けてください。わたしたちは弱り果てました。／わたしたちの救いの神よ、わたしたちを助けて…救い出し／わたしたちの罪をお赦してください。(8, 9) と、この苦難、侮辱は、神が わたしたちの昔の悪、即ち、過去の罪に対する裁きと理解します。そして、懺悔し、救いを求めています。自らが招く苦難もあるでしょう。私も苦難の時、逃れる道を求めて祈るしかない者ですが、苦難を裁きや罰と捉えることはできません。けれども罪と悔い改めを人間は繰り返してばかりいると実感します。

詩人は同時に どうして異国の民に言わせてよいのでしょうか／「彼らの神はどこにいる」と。(10) と、神の権威にかけて、民を救えと言わんばかりです。あなたの僕らの注ぎ出された血に対する報復を／異国の民の中で、わたしたちが／目の前に見ることができますように。4 連ではその思いが強まり、主よ、近隣の民のふとこに／あなたを辱めた彼らの辱めを／七倍にして返してください。(12) と、7 倍の復讐を願っているのです。そして、最後に わたしたちはあなたの民／あなたに養われる羊の群れ。とこしえに、あなたに感謝をささげ／代々に、あなたの栄誉を語り伝えます。(13) と、感謝と恭順を捧げています。民の心髄である信仰を汚し、侵し、奪うことは耐え難い苦しみ、怒りでした。それをもって復讐するとは、問題ですが、賠償してもらう必要はあります。

古代では民は宗教によって団結できたかもしれませんが、現在では、信教の自由は民である集団が持つものではなく、個人の権利であり、民ではなく個人が尊重される権利だと心に刻みたいです。

『讚美歌 21』は 16「われらの主こそは」を挙げています。 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-06-20>
♪われらの主こそは 世界の王なれば♪ と、私たち、信徒たちは信じ、心から感謝して歌いますが、他の考えを持つ人もいます。互いを受け入れることが必要です。

ジュネーブ詩編歌はピオラ・ダ・ガンバと素朴なルネッサンス・ギターの合奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=4nERu2ro-9c&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=79>